
天龍村クエスト

安楽樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天龍村クエスト

【Nコード】

N1394Q

【作者名】

安楽樹

【あらすじ】

ある村の出来事に巻き込まれてしまった子供たちの悲哀と反乱。

ある朝目覚めたら、勇者と呼ばれた少年少女たち。

え？こことって普通の村じゃなかったの？

そんな天龍村で起こるコメディー。

※テーマは、文章をどこまで漫画に近づけられるか？……です。

第1話 起きなさい勇者よ

「将来天龍村に住もうかと思った。……何でかというと、名前がカッコ良さそうだから」

（漫才からコントへと切り替わる時の雰囲気で）

＊

……昔、この村には、『空高く龍駆け登る時、全ての魔を払う勇者が現れる』という伝説があった……

母「勇者、起きなさい勇者よ」

勇^{イサム}「……へ？母ちゃん？」

母「起きた？起きたら今日はお城へ行くのよ？」

勇「……朝から何言ってるの？そりゃ入学式だから高校には行くけどさ。……何？お城って」

母「いいから早く仕度しなさい」

勇「？」

＊

（学校に登校する）

勇「おお、勇次^{ゆうじ}。おはよ」

勇次「お、勇。はよ」

勇「何か今朝、うちの母ちゃんがヘンなこと言い出してさ……」

勇次「え？お前んとこも？うちもいきなり訳の分からんこと言い始めたんだぜ？」

勇梨「おはよう！ また高校も私たち3人だけみたいね」

勇「お、おはよ」

勇次「おー勇梨。そうみたいだな……ってアレ何だ？ まさか先生……じゃないよな？」

勇&勇梨「「げげっ！」」「Σ（□）Σ（□）」

変な格好をした先生「ようこそ勇者の諸君。さあ王様がお待ちだ」
一同「「はあ？」」「」

王様の格好をした村長「良くぞ来た。選ばれし者たちよ」

勇次「うわホントに王様だよ！」Σ（□）」

村長「然様。我が村では、高校生になった子供たちは勇者として、村への貢献が決められておるのじゃ」

勇「……ホントかよ、初めて聞いたぜ」

勇梨「私も……」

村長「ついてきなさい」

（訳の分からぬまま移動させられる）

村長「ほら、ここがルイーダの酒場じゃ」

勇次「内田さんちの食堂じゃねえかよ！」

村長「何言っておる、ほら、ルイーダじゃ」

内田さん「ルイーダデス、ヨロシクネ」

勇梨「おもいきり不自然なカタコトなんだけど……」

村長「ここでパーティーを組むのじゃ。ほれ、そこに登録されておる冒険者の一覧が載っておる」

内田さん「スキナヒトエランデネ」

いさむ「マジかよ……。なにになに？『せんし／ヨシツネ』だって。何か強そーなのがいるぞ。どれだ？」

ヨシツネ「……（プルプルプル）」

いさむ「隣の爺ちゃんじゃねえかよ！Σ（□）もう（82）じや冒険は無理だろ！LV高すぎだよ！」

勇次「じゃあ他には……？何か『ウメ』とか『サクゾウ』とかしかいねーぞ……？大丈夫かよ……。あ、『ぶとうか／リキ』だって。どれだ？」

リキ「（椅子に座っている）……………」

いさむ「ダメダメダメ………あれはダメ」Σ（□）

勇梨「何でよ？すぐ強そうじゃない、あの人」

いさむ「だってアレ、うちの父ちゃんだもん……」

勇梨&勇次「何っ！」Σ（□）Σ（□）

いさむ「確かに少林寺3段だけでも！」

村長「……なんじゃ、まだ決まらんのか？」

勇次「まともな奴いねーじゃねえかよ！」Σ（□）

村長&先生「（ひそひそ）……」

勇次「なんだよ、怪しいな……」

先生「キミ！王様に対して無礼だぞ！ちよつと来なさい！」

いさむ「あっ、勇次！おい！」

（……。）

勇梨「何なの急に……？」

勇次「うわああああああああああっっっ！」

いさむ&勇梨「勇次っ！どうしたっ！？」

そうりよ／ゆーじ「髪の毛刈られた……」○「――」（ガクッ

いさむ「おい！『そうりよ』になってるぞw、ゆーじ」Σ（「」）
ゆーじ「……ちくしょ、あいつらうちの実家が寺だってことに気付いたんだ！」

いさむ「（……なるほど）」

勇梨の母「勇梨ちゃん？ちょっと来なさい」

勇梨「（ギクッ）えっ！ママ！何でいるのっ!？」

一同（嫌な予感）……。

勇梨「きゃあああああぁあぁあぁっ!!!」

ゆーじ「やはりか……」

いさむ「どうした!？」

まほうつかい／ゆーり「む、無理やりマントとミニスカート着させられた……（泣）。『女は誰でも魔法使いなのよ』……て、意味わかんないんだけど……」

いさむ&ゆーじ…Σ（□）Σ（□）

「……いや、これはこれでいいんじゃないかな」

「……うん、そうだな」

ゆーり「ちよっとっ!!!」

村長「ふおっふおっふお。どうやら無事仲間を見つけたようじゃな、勇者よ」

一同「あんたが無理やり作ったんだろ!」Σ（□）

村長「さて、次は冒険に出る前に武器を装備せねばな。武器は装備しなければダメじゃぞ？」

ゆーじ「こういうとこだけ妙に設定が細かいな……」

（武器屋へ移動）

武器屋「へいらっしやい！」

いさむ「武器屋、てここ町の農具屋じゃねえかよ……」

村長「オヤジ、例のものを頼む」

武器屋「あいよっ！勇者特製の奴だね。ほらよっ！」

いさむ（ゆうしゃのナタを手に入れた）

ゆうじ（ひのきのぼうを手に入れた）

ゆうり（ひのきのつえを手に入れた）

いさむ「ナタかよ……」

ゆうじ「枝か……」

ゆうり「枝……」

村長「よし、立派に武器も揃ったな。それでは冒険に出発じゃ！」

一同「……」

ゆうじ「防具屋は無いのな」

いさむ「俺なんてまだ制服だぞ」

村長「まず君たちが向かってもらうのは、村の北の森じゃ。そこで

出没するモンスターを倒してきてほしい」

ゆうり「モンスター？……ってホントにいるわけ？」

ゆうじ「この分だと、誰か着ぐるみでも着て襲ってきそうだな」

いさむ「この大人たちならやりかねんな」

村長「村の外は危険じゃからな。『せんし』を一人連れて行け」

（無言で後ろにいるヨシツネ）

いさむ「ええっ！？Σ（□）戦士ってヨシツネ！？勘弁してよ……」

村長「頼んじゃぞ、ヨシツネ」

ヨシツネ「（無言で頷く）コクコク」

＊

いさむ「さて、この辺だろ北の森って」

ゆーじ「森なんて広すぎてわかんねーよな」

ゆうり「ちゃんと看板立ってるわよ『北の森』って」

ヨシツネ「（プルプルプル）……」

一同「……」

ゆーじ「大丈夫かよ……」

いさむ「さて、今度は何が出てくるんだ？」

……ガサガサッ

イノシシがあらわれた。＞コマンド？

一同「……」（―――）

「……あれ、本物だね？」

「……ああ、俺一回見た事ある。残念ながら本物だ」

「マジかよ……」

＞にげる

一同「うわああああああああっっ！……！」

ゆうり「ちよつとアンタ！勇者でしょ！？女の子置いて逃げるんじゃないわよ！」

いさむ「うるせえお前まで都合のいい時だけ勇者扱いするんじゃないやねえよっ！」

ゆうじ「ゆうりちゃん俺が！俺がおぶってあげるよ！そうりよだし！（↑？）」

ゆうり「ああっ！ヨシツネが！？」Σ（□）

ヨシツネ「（プルプルプル）……」

いさむ「ああっ！ヨシツネ！」Σ（□）

いさむ&ゆうり「ゆうじ頼んだ！」「ゆうじ君お願い！」

ゆうじ「何で俺がああああっ！………分かったよっ！……！」

＊

いさむ「あ、危ない所だった……」

ゆうり「普通に本物じゃないの……」

ゆうじ「ぜえっぜえっぜえっ……ゴホッゴホッ」

ヨシツネ「（プルプルプル）……」

いさむ「こんなのはゲームのモンハンだけにしてくれよな……」

……ガサガサガサッ

クマがあらわれた。＞コマンド？

ゆうじ「……＞コマンド？じゃねえよ」

＞ひっしでにげる

一同「勘弁してくれえええつつつ!!!」
いさむ「……誰だこんなところにドングリ撒いた奴はっ!!!」

（帰ってくる一同）

いさむ「元猟師のヨシツネがいなかったらどうなってたか分からないぜ……」

ゆーじ「ああ、懐から猟銃取り出したときはまさかと思ったがな」
ゆうり「私も目を疑ったわよ。……今日は熊鍋ね。もうおなかペコ」

ヨシツネ「（にこにこ）……」

いさむ「……ん？」

ゆうり「何、あれ？」

いさむ「……おい、いつからうちの村の役場はラブホになったんだ？」

ゆーじ「……しらね」

ゆうり「何か下に人がたくさんいるけど?……嫌な予感」

村長「ほら! たった今帰ってきました! 我が村の勇者一行です!」

観客「わあああああっ!」

（観光客に囲まれる勇者一行）

ゆーじ「なんだなんだ?」

いさむ「何だこの騒ぎは?」

村長「さあ皆様、こちらが天龍村名物、天龍の勇者様ご一行ですよ! 記念写真は順番に並んでください! はい、押さないで押さないで

！
」

垂れ幕…『勇者の伝説の地、天龍村へようこそ』

観光客「キャー！ホントに勇者って書いてあるんだ！かわいいーっ！」

いさむ「か、かわいい？」

観光客「こっちは魔法使いだって！なんか森ガールみたい！」

ゆうり「も、森ガール？」

観光客「こっちの子はなんかハゲてるーっ！なんかキモーい！」

ゆうじ「何で俺だけ！？」

（ザワザワザワザワ……）

＊

いさむ「……おいジジイ、詳しく聞かせてもらおうか」

村長「……ついにバレてしまったか……」〇「――」

ゆうじ「あんだだけ騒げばな」

村長「実はな、この天龍村には古くからの言い伝えがあるのじゃ」

一同「言い伝え？」

村長「……そう。この天龍村には、古くからの勇者伝説が残されておるのじゃ」

一同「勇者伝説！？」

村長「……昔、この村には、『空高く龍駆け登る時、全ての魔を払う勇者が現れる』という伝説が……」

いさむ「ああ、あの駅前に去年の始めぐらにできた石碑に書いてある奴？」

ゆうじ「はいはい、一昨年の村興し村議会でなんか決まった後、急

に建てられた奴ね」

ゆうり「それまでには一っ言も聞いたことなかったあの伝説ね」

村長「……。オ、オホン、それでじゃな、せっかくそんな伝説があるんじゃないから、こりゃあこの村の魅力を訪れる人々にもぜひ知ってもらわんといかんじゃろうと……」

一同「……（疑いの眼差し）」

村長「頼むっ！この村のために力を貸してくれいっ！（土下座）」

○、「――」

ゆうじ「そ、そこまでするか……っ!？」

いさむ「あーあ、天龍村なんて名前だけはカッコいいと思ってただけどな……」

村長「おっ、それはじゃな、谷から湧き登る白いもやが、まるで天翔る龍のようだったということから天龍村と……」

ゆうじ「何が天翔る龍だよ！あんのは龍みたいにグネグネ曲がった道路だけじゃねーか！」

村長「そこを何とかっ！頼むっ!!（土下座）」○、「――」

ゆうじ&ゆうり「村長……」

いさむ「……わかったよ……。村長がそんな軽々しく頭下げるなよ」

村長「あ、そう?（「――」）☆じゃあ、明日からは天龍村観光親善大使として、毎日一時間『奉仕』の授業ができるからの、このカリキュラムに従ってじゃな……」

ゆうじ「カ、カリキュラム!？」Σ（□）

村長「放課後には『勇者ショー』の稽古が始まるからの、あと町への出役はほどほどにの、『かゆい所に手が届きそうで届かない』ぐ

らのレア感が重要じゃからな……」

ゆーり「ゆ、勇者ショー!?」Σ（□）

いさむ「……」

ゆーじ「全部出来レースだったってわけかよ……」

村長「あとはじゃな……」

いさむ「あーわかった。……そういうことか、わかったよ。それならそれでOK」

村長「おーそうか、わかってくれたかの」

いさむ「俺は勇者として旅に出るぞ。こんな村、誰が居てやるかっての」

村長「な、なんじゃとおっ!?」Σ（□）……いやいや、それは待ってくれ」

いさむ「いや待たねえ。安心しろ、行く先できちんとこの村のことは宣伝してやるから」

村長「いや待った待った。勇者が居てくれないとこの村の観光が成り立たん」

いさむ「しらねーよそんなの。勝手に勇者饅頭でも何でも売りゃーいいじゃねえか。じゃあな」

ゆーじ&ゆーり「いさむ!」Σ（□）「いさむ君!」Σ（□）

村長「やばいぞ勇者が逃げる!」Σ（□）皆の者、捕まえるんじや!」

（ウーウーウー!!!）

追い詰められる勇者

村長「ふふふ、もう逃げられんぞ勇者よ。……大人しくこの村の観光大使としてマスコットキャラになるが良い！」

いさむ「やだね！」

村長「勇者よ。一体何が不満なのだ？退屈そうな学校の授業からも解放されるし、きちんと村からの手当として、お主の小遣いだってUPしてもらうよう交渉してやっても良いぞ？」

いさむ「……ふざけんな」

村長「……何？」

いさむ『あんたらに決められなくても、自分の意思で進む道は決める、それが本当の勇者だ！』

一同「おおっ！」

村長「勇者よ、見事な台詞じゃ。……分かった。ワシらの負けじゃいさむ「やつと引き下がる気になったかよ」

村長「じゃが！勇者なら勇者らしく、最後にこのボスを倒してからゆけい！」

コツコツ……

母ちゃんがあらわれた。>コマンド？

>にげる

>ゆうしゃはにげだした。……だが、まわりこまれてしまった！

母「アンタ、出てくならこの間おこづかいの前借りした分、ちゃん

と払ってから行きなさいよ」

いさむ「ぐううううっ！それは無理っ！すいませんでしたあ…
…っ！」○「——（バタッ

ゆうしやたちはぜんめつした……。

村長「おお勇者、死んでしまうとは情けない……」

いさむ「死んでねーよ。……くそ、どいつもこいつも！覚えてろよ、
絶対！」

一同「「「……こんな村、出てってやるーっ！！」」

勇者たちの伝説はつづく……

第2話 竜王町へのお使い

いさむ／ゆうしゃLV2…反抗期継続中

ゆうじ／そうりょLV2…遊び人ではないかとの説もある

ゆうり／まほうつかいLV2…父親とは半年以上まともに口を利いていないらしい

(ガタンガタン……)

勇者たち一行は、電車で山梨県の竜王町へと向かっていた。

天龍村長「いいか！君たちの倒すべき敵は、『竜王町』におる！」

(△△)

ゆうじ「なんかいきなりテンション高いな村長」

いさむ「やたらと具体的だな……。しかも竜王っていきなりハードル高くないか？ラスボスカよ」

という村長の力説により、友好都市間交流として彼らは竜王町へと行くことになったのだった。

ゆうじ「どうでもいいけど、何でまたヨシツネがいるんだ？」

いさむ「さあ？」

ゆうり「お爺ちゃん、電車長いけど大丈夫？」

ヨシツネ「(コクコク)」(――)」

でもまあ、村の中でじっとしてるよりはマシかと、修学旅行気分で話に乗ったのだった。

ゆうじ「それにしても、着替え持ってきてよかったな」

いさむ「確かに。あの村長ども、ホントにあのわけの分からん格好で乗せるんだもんな」

ゆうり「ホントホント。あんなカッコ、恥ずかしすぎて人前で着れたもんじゃないよね？」

いさむ&ゆうじ「……」（――）（――）

ゆうり「……な、何？」

ゆうじ「……いや、お前はあれで良かったんじゃないかな」

いさむ「……うん、そうだな」

ゆうり「ちよっとっ!!」Σ（□）

＊

車掌「次はく竜王く竜王く」

ブッシュッ

いさむ「着いたか」

ゆうり「ここが竜王町？」

ゆうじ「やたらモダンな駅だな。まるで安藤忠雄の建築物だ」

パーンパーン！

変な格好をした竜王町長「お待ちしております！勇者ご一行様！隣の人「どうぞどうぞこちらに！」」

垂れ幕…『歓迎 勇者様ご一行 ようこそ魔王縁の地、竜王へ』

いさむ「何だあの垂れ幕……」

ゆーじ「猛烈に嫌な予感がするな……」

ゆうり「ええ……」

竜王町長「さあ、ついに最後の町へやってまいりましたね勇者様！

ここで最後の装備を整えて行ってください」

いさむ「は、はぁ……」

ゆうり「なんかこれ、前にも見たことある風景ね」

いさむ「デジャヴって奴だな……」

女性「お、お爺ちゃん……」

ヨシツネ「……………（プルプルプル）」

ゆうり「……お爺ちゃん？」

女性「皆様、どうもありがとうございます。わざわざお爺ちゃんをここまで送ってきてくれて……」

ゆーじ「ヨシツネの家族がいたんだな、ここ」

ゆうり「どうりでね……ふふ、嬉しそう」

いさむ「そうだな」

竜王町長「さあさあ、まずはここ『赤坂台総合公園、通称ドラゴンパーク』ですぞ」

隣の人「このドラゴンパークはですな、ここ竜王町でも最も風光明媚な場所で、恋人同士からファミリーまでどなたでも楽しむ事ができると評判なかん好スポットなのです！」

いさむ「は、はぁ……」

隣の人「さらに何と、高さ33メートルの展望塔からは、南に富士山、北に八ヶ岳がよく見えると大人気なのです！近くでは昼食はもちろんの事、デートに最適な場所はここを置いて他にはございません！」

ゆうり「さっきから後ろに着いてきてる、この人たちは一体何なの

「……？」

ゆーじ「どうやら、みんなマスコミっぽいな……」

竜王町長「さあお待ちいたしました勇者様！最上階にあるこれが伝説の武器、『天空の剣』ですぞ！」

隣の人「さあ、勇者様。どうぞ剣を手にお取り下さい！」

パシャッパシャパシャッ……！！

町の人「ワアーッ！！！！（パチパチパチ）」

いさむ「騙された……」

ゆーじ「そうだな。あの村長どもがただの旅行なんてさせるはずないよな……」

隣の人「はい、それでは竜王様に止めの一撃をどうぞっ！」

竜王町長「待て、その前に聞く事がある。……勇者よ、我が下僕とならんか？そうすれば、この町の半分をくれてやるぞ？」

いさむ「……いや、この町の半分もらってもな……」

竜王町長「さすが勇者よ、このような口車には乗らんか……ならばこの手で葬ってくれる！」

隣の人「よろしいでしょうか？さて、では改めて止めの一撃をどうぞ！」

ゆーじ「……」

ゆーり「……」

いさむ「……（グサッ）」

パシャッパシャパシャッ……！！

竜王町長「ぐわあーっ!!! バタッ」〇——<
町の人「ワアーッ!!!」(パチパチパチ)」

町長「ささ、おめでとうございます。ついにやりましたね!……明日からは魔王倒し記念パレードが始まりますぞ」
隣の人「今夜はゆっくりとお休み下さい」

一同「ははは……」——1(「」)

*

いさむ「ゆーり……ゆーり……!」

ゆーり「な……何よこんな夜に」

ゆーじ「いいから早く着替えるんだ、ほらっ」

ゆーり「キャッ! Σ(「」)どさくさに紛れて布団めくらないでよ! 一体何なの!？」

いさむ「いいか……、ここがチャンスだぞ」

ゆーり「えっ、何が？」

ゆーじ「俺たちはこのまま、帰りの金を持って東京に行く」

ゆーり「ええっ!!……あの闇の大地《東京》^{アレフガルド}にっ!？」Σ(「」□)

いさむ「シート! 声がでかい」

ゆーじ「このままここにいたら、村みたいにいのように扱われるのがオチだ」

ゆーり「……で、でも……」

いさむ「無理には言わんが、折角山梨まで来たのにこのままあの村に戻るつもりはない」

ゆーじ「東京^{アレフガルド}まではあと少しだ」

ゆーり「そ……う、そうよね。分かったわ! ちょっと待ってて!」

Σ（へ、）

いさむ&ゆーじ「よっし！」

ウーウウーウーウー！！！！

いさむ「この音……嫌な予感が……ッ！」

町長の声「勇者諸君、勇者諸君、君たちの企みは聞こえているぞ！
大人しく自室へ戻りたまえっ！」Σ（□、）

ゆーじ「やばいバレたっ！急ぐぞ！」Σ（□、）

いさむ「盗聴器とは……やってくれるぜ！」

ゆーり「最初から逃がすつもりはなかったようね。……よし、いいわ！」Σ（◇、）

いさむ「——行くぞっ！」

ダダダダダッ！！！！

——ゆうしやたちはにげだした！

＊

——しかしまわりこまれてしまった！

竜王町長「ふふふ、もう逃げられんぞ勇者よ……」（ー、）

いさむ「別に聞きたくもないけど一応聞いておいてやる。……一体何なんだ？これは」

竜王町長「昔から、天龍村と我が竜王町は姉妹都市として……」

ゆーじ「ハイもういい。充分分かりました」

ゆーり「最初からグルだったってことね……」

いさむ「まあいい。ここを抜ければホームまですぐだ。走るぞ――！」

町長「待ったあっ！！……この魔法だけは使いたくなかったが仕方ない」

ゆーじ「……何だ？何か奥の手があるのか？」Σ（□）

いさむ「うっ……三度何か嫌な予感が……！」

竜王町長はなかまをよんだ！

R R R R R ……

竜王町長「……あ、もしもし？お世話になります、竜王の町長をやつとる者ですが。……あ、ええええ。どうもこちらこそ大変お世話になっております、あ、ハイ……」

ゆーじ「長くなるのか……？」

竜王町長「ええ、そうなんですよー。ですのでぜひお力をお借りしたく……ハイ。今本人を映しますので」

ゆーり「TV電話なんて、……予算あるわねこの町」

声「……勇者？」

いさむ「……母ちゃん!?」Σ（□）

いさむの母「……勇者。まだ前借りしたお小遣い返してなかったわよね……？」

いさむ「まいりましたあっ！！！」○——（ガクッ

＊

女性「本当にありがとうございました……」

ひ孫「おじいちゃんまたねっ」

ヨシツネ「(コクコク)」

ゆーじ「じーさん、この町に家族が居たんだな……」

いさむ「まあ、ヨシツネが連れてこれただけでも良しとするか……」

ゆうり「そうね……」(T|T)

勇者たちの伝説はつづく……のか？

第3話　そして伝説へ……（前書き）

いさむ／ゆうしゃLV3…東京では、原宿に行ってみたかった
ゆうじ／そうりょLV3…東京では、歌舞伎町に行ってみたかった
ゆうり／まほうつかいLV3…東京では、渋谷に溶け込めるかどうか心配していた

第3話　そして伝説へ……

竜王町からの帰り道。

勇者たちは、せめてもの情けに2泊3日の東京旅行^{アレフガルド}を許可された。

ヨシツネからの説得もあり、念願の闇の大地へと足を踏み入れて意気揚々と帰ってくるかに思われたが……。

ガタンゴトン……

いさむ「お、恐ろしいところだったぜ《東京》……」――1（――

ゆーじ「全くだ。闇の大地と恐れられるだけはある……」――1（――

ゆうり「まだ私たちにはLVが高すぎたみたいね……」――1（――

いさむ「だが、だが負けん！　いつか必ずまた辿り着いて見せるぜ！
あの大地に！」

ゆーじ「おおっ！　Σ（□）　何だか勇者っぽい台詞だな」

ゆうり「私も！　そのうち東京が似合うOLになって見せるわ！」

ゆーじ「OL？　お前が働けるとこなんて……ぱふぱふでもすんのか？」

いさむ&ゆーじ「（じっ）……」（――）（――）

ゆーじ「悪いことは言わん、やめとけ」

ゆうり「何でよっ！」Σ（□□）

＊

>天龍村へ

ゆーじ「久々に村に戻ってきたな」

いさむ「ああ。こうしてみると、この村も悪くないって思えるな」

(「い」)

ゆうり「ええ。東京は暑いし空気が悪くて」

いさむ「とりあえず、酒場にでも行ってみるか」

内田さん「おう、どうだった遠征は？こっぴどくやられたか？」

ゆーじ「いや、まだまだ俺らじゃLVが低すぎたみたいだね」

内田さん「はっはっは、そりゃそうだろ！20LV早いってもんよ」

母「……勇者、分かったでしょ？まだしばらくはこの村で経験値を積むことね」(「い」)

いさむ「……ああ、わかった。俺も客引きでも何でもするよ。その代わり、手伝い料貯金させてくれよな」

母(さすがかわいい子には旅をさせると言ったもんだわ……。確実にLVUPしてるわね。こりゃ船を手に入れるのも時間の問題……?)

*

(勇者の格好をして観光案内をするいさむたち)

いさむ「ん？何か妙に観光客が少ないな……？」

ゆーじ「こっちもだ。暇でしょうがないぜ」

村長「ついに気づいてしまったか……」

TV『——というわけで、今兵庫県のFF村では、タマネギ剣士ツアーが大人気なのです——！』

村長「この通りじゃ」

いさむ「FF村……？」

村長「そう。お主たちが留守にしている間、すっかり人気を向こうに持って行かれちゃったわい……。おかげで村では、ダーマの神殿へと足が向かう大人が続出なのじゃ……」

ゆーじ「ダーマの神殿？……ああ、ハローワークね」

村人A「やっぱ、無理があったのかな……」――1（「」）

村人B「ハードの変化について行けなかった時もあったし……」――

――1（「」）

村人C「あっちはもうオンラインだしな……」――1（「」）

村人D「海もあるし、暖かいってのもでかいな……」――1（「」）

ゆーじ「な、何だよこの陰気っぷりは……？」

ゆうり「私たちが出る前が嘘みたい……」

いさむ「……」

村長「もう、すっかり大人たちはこの通りじゃ。所詮こんな山奥の村が村興しなんて無理があったのかの……」

ゆーじ「……」

ゆうり「……」

いさむ「そんなモンだったのかよ……」

村長「……？」

いさむ「そんなんで諦めるんだったら、一体何のために俺たちは勇者なんてやったんだよ！」Σ（へ）

ゆうり「そうよ！そんな簡単に諦めないでよ！」Σ（へ）

ゆーじ「だったら……俺たちが何とかしてやんよ！」Σ（へ）

村長&村人たち「お前たち……」

いさむ「まだ諦めるには早いよ！」Σ（□）

ゆうじ「俺たちも何かいいアイデア考えようぜ！」Σ（□）

ゆうり「そうよ！みんなで考えれば、何かいい案があるはずよ！」

Σ（□）

ゆうじ「……そうだ！じゃあ四国と提携して、『せかいじゅのはっぱビジネス』なんてどうだ？」

いさむ「だったら、長ネギの『光の剣』を作って、それを装備した『長ネギ剣士』なんてのは？」

ゆうじ「決め台詞は、『硫化アリルが目に沁みるぜ……』だな！」

村人A「……そ、それなら、オクラの『グリーンソード』って手もあるぞ？」

村人B「じゃ、じゃあカボチャの『鉄かぶと』もアリだな！」

ゆうじ「おおっ！そりゃいいじゃねえか！特産品になりそうだな」
いさむ「その調子だよみんな！」Σ（□）

ゆうり「……ダメダメ！こんな山間地のどこに生産量を確保できるような面積の畑があるってのよ？ブランド化するなら、まずはある程度の安定供給できるような数を確保しないと！やるなら上伊那地域の長ネギ生産地域と組むか、山林で作れる商品を開発しないとダメよ！」

ゆうじ「ゆうりの奴、いつの間に商人に転職したんだ……？」

いさむ「さすが丸の内OLを目指すだけあるな……」

勇者たち「……ボソボソ（何やら相談している）」

村人たち「ワイワイガヤガヤ……（ああでもないこうでもない騒ぐ）」

いさむ「……これだけ元気が出れば、もう大丈夫だよな」（「」）

ゆうじ「……ああ」

村長「……？どうということじゃ？」

いさむ「俺たち、旅に出るよ。……今度は本当の旅だ」

母「旅？」

ゆうじ「今のままじゃ、この村は寂れていく一方だ。だから俺たちが、この村を救う方法を探してくる」

ゆうり「安心して。必ずいい話を持って帰ってくるから」

村長「お主たち……」

母「勇者……」

いさむ「安心してくれよ。必ずこの村に平和を取り戻してくるから」

ゆうじ「そう。俺たちだけが勇者なんじゃない。……みんな一人一人が勇者なんだよ」

ゆうり「……ゆうじにしてはカッコいい台詞じゃない。ふふ」
（「」）

村長「……『そして伝説へ……』か。分かった。気をつけていくのじゃぞ、勇者よ」

勇者たち「ああ。……行ってきます！」Σ（□）>

＊

……それからしばらくして、天龍村にはこんな貼り紙が貼りだされるようになった。

『天龍村は、村を元気にしてくれるあなたのような勇者を待っています！』

……これが、天龍村の地域おこし物語だ。

田舎はいつでも、君の力を待っている。

天龍村クエスト GAME OVER . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394q/>

天龍村クエスト

2011年10月10日04時14分発行